

～漆でつながる現在・過去・未来～八幡平市斎藤家古文書を通して～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 地域文化資源(漆器問屋史料と漆器業)を核とする地域振興に向けての基礎的研究
 研究代表者 : 盛岡短期大学部 准教授 三須田善暢
 課題提案者 : 八幡平市教育委員会
 研究メンバー : 林雅秀(山形大学)、高橋正也(東北活性化研究センター)、外崎理紗(八幡平市博物館)、長谷部陽(東北大学)、石沢真貴(秋田大学)、庄司知恵子(社会福祉学部)
 技術キーワード : 漆器・古文書・大屋斎藤家・地域振興・八幡平市

研究の概要

本研究は八幡平市における地域文化資源(漆器問屋史料と漆器業)を核とする地域振興に向けての基礎的研究とし、以下3点の作業に取り組んだ。

- (1) 八幡平市石神・大屋斎藤家の文書の撮影・整理・保管・分析
- (2) 斎藤家の漆器生産の様子の解明
- (3) 地元漆器業(安比塗)・関連業との連携、斎藤家文書らの文化資源と地域振興との結びつきの模索

【大屋斎藤家】斎藤家は、社会学・民俗学・社会人類学上貴重な調査対象であり、戦前期に渋沢敬三主宰のアチックミュージアムによる共同調査の対象となった。斎藤家は、「大屋(オオヤ)」という屋号をもち、「名子(ナゴ)」(大屋と強く結びついた農民)を含めた大家族制度を保持していた家であり、漆器問屋でもあった。有賀喜左衛門によるモノグラフ『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』(1939)における名子制度の分析は、日本社会の基礎構造たる「同族団理論」を明らかにしたものと今日でも高い評価を与えられている。しかしこれまでその史料については一部を除き公表されることがなく、当該史料が散逸しつつあった。また、関連する研究をみても、当該地域における漆器業に関する分析が弱く、地域としても学界としても資・史料の整理・保管・分析が求められている状況にある。

研究の内容

主な研究内容は、以下5点である。

- (1) 資料の写真撮影、目録作成、解説・分析作業。
- (2) 既存の研究の整理と比較対象となる漆器業産地(秋田・川連地区)の調査(継続中)。
- (3) 当該地域と関係の深い郷土史家(矢萩昭二氏・工藤利悦氏)と学習会の開催。
- (4) 2015年11月7日の第63回日本村落研究学会大会、11月21日の市場史研究会2015年秋季大会にて報告。
- (5) 以上作業を踏まえたシンポジウムの開催(2016年3月4日『安比塗と文化資源を考える』於：八幡平市博物館)

研究の結果

- 結果(1) : デジタルカメラにより現存する斎藤家史料をほぼ撮影した(撮影枚数17059枚:写真1)
 →散逸防止と公共的利用への一歩を踏み出すことが出来た。
- 結果(2) : 目録を作成しつつ(表1)、書簡類および大福帳の一部は分析を行っている*
 →漆器業に関する染料や木地の取引だけでなく、酒屋・馬産など多様な商売を複合的にやっている。
- 結果(3) : 八幡平市博物館との連携によるシンポジウム「安比塗と文化資源を考える」の開催。
 →研究者、博物館、工芸家、販売者それぞれの情報共有とネットワーク形成ができた(「おわりに」参照)。



写真1

解説の過程で、有賀が調査時に当時の当主斎藤善助と頻りにやり取りした書簡が見つかり、学界上の重要性を鑑みて全体に先駆けて翻刻をおこなった。そこから、有賀のモノグラフが斎藤氏、佐藤氏との綿密なやり取りから生れたことが明らかになった。調査方法としても面白い視点である。
 ※三須田他 2016 「石神大屋斎藤家所蔵有賀喜左衛門関係書簡類」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』(18)、1-20。

写真1は撮影した一部資料である。左奥に見える冊子体のものは「大福帳」といい、斎藤家における当時の取引を示した資料であり、漆器にかかわる取引内容も確認できる。他にも、紙片一枚もの資料がたくさん存在する。写真2は民藝運動家の柳宗悦らが、積雪地方農村経済調査所との関係で石神を訪れて漆器生産を視察した際の色紙である。柳らは、当時の農村疲弊を改善するために農家副業としての工芸品の製造・販売に力を注いでいた。写真3は文化5年に斎藤家において作成された漆器であり、そのレベルの高さがうかがえる。これらの関連を分析していくとは、現在の漆器業振興に寄与する一助となると考える。

表1: 作成目録(一部)

資料番号	資料名	内容	西暦	年月日	差出	受取	備考
斎1	官地株系探原書	株の刈り取りについてか?	1881	明治14年9月			47名の署名あり 裏面に鉛筆で牧野整理についての日程がある
斎2	神宮大麻と厨について						
斎3	牧野整理補助金	補助金の内訳		明治■年1月15日			裏にも書き込みあり
斎4	牧野関係の費用	費用の内訳		明治■年9月29日-30日			裏にも書き込みあり
斎5	〃	〃		明治■年9月29日-10月1日			
斎6	昭和7年度生草払下請入費(昭和10)年度国有地放牧料割出台帳	探原関係の費用・馬調べなど各種費用、個人別の費用	1932				
斎7		国有林雑立木買受	1935				
斎8	委任状	国有林雑立木買受申込・締結に関して		昭和13年5月			
斎9	奨励金交付状		1932	昭和7年3月31日	農林省畜産局長	斎藤善助	種牡馬について種牡馬飼養の奨励金、50円交付
斎10	種牡馬飼養奨励金交付状		1932	昭和7年3月31日	農林大臣	斎藤善助	

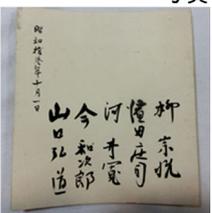


写真2



写真3

おわりに

今後も収集した史料の分析を進めることが第一であり、そこで発見された知見を公表し、漆器業の振興に結びつけていきたい。おそらく手法は多々あるが、継続的な取り組みが必要だと思われる。とはいうものの、緊急性を帯びた面もある。たとえば、漆器を乾燥させる室(ムロ)は、現在八幡平市にはわずか1つしか残っておらず、しかもそれも崩壊の危機にある。その保存作業には金銭的な問題もあるが、応急措置として3D技術の活用もありうることを、シンポジウム当日にフロアーにいた県立大の職員から指摘された。多方面の方との連携で新しい道を見出していきたいと思う。